

近世の世界観

——『和漢三才図会』と『唐土訓蒙図彙』の考察——

久能清香

羽民——空を飛ぶ人、女人国——女性ばかりの国、脚長——脚が長い人々……。全て江戸時代には活躍した医者、寺島良安の手によって書かれた、図説百科事典ともいえるべき書物『和漢三才図会』^{注1)}に実際に登場する異国である。そのどれもが新鮮であり、驚きに満ちている。これら荒唐無稽な国々は、どこまで江戸の人々の間に浸透していたのだろうか。本稿では、『和漢三才図会』が出版されたと、ほぼ同時期の百科事典や世界地図を取り上げ、当時の世界認識を考えていきたい。

『和漢三才図会』は序が正徳二年（一七二二）、跋文が同五年（一七二五）に書かれた。それより遅れること約四年、享保四年（一七一九）に『唐土訓蒙図彙』^{注2)}が刊行された。

『唐土訓蒙図彙』では、人物四・五に異国人物が（異国を表す挿絵＋その国に対する説明書きという形で）記載されている。（説明書きのない異国もある）

『和漢三才図会』に描かれる一九〇の異国のうち、一四一ヶ国で『唐土訓蒙図彙』でも存在が認められた。一四一ヶ国について挿絵及び記述からみる差異についてみていきたい。尚、一四一ヶ国中、挿絵のみで記述（文字）が見当たらなかった国が、三五ヶ国あった。よって本稿では、挿絵による差異を一四一ヶ国で見、記述による差異を一〇六ヶ国でみたい。

表にはそれぞれ、『和漢三才図会』での国名、『唐土訓蒙図彙』での登場の有無（注二による頁数を含む）、記述、及び挿絵の違いについて収めている。挿絵の違いにみえる一から五までの数字は、それぞれ次の意味を含むものである。

5 ↓ 凡そ同じ

4 ↓ 手に何かを携えている、壺などを持っている（無機物限定）

建築物のデザインの差異

3 ↓象やその他の動物と共に描かれている。人数の増減もここに含む

2 ↓服装や体の様子（動作含む）が異なる

1 ↓全く異なる

例えば、象がおり（3に当る）、尚且つ弓を帯びない（4に当る）場合には、3と表記した。

以下、『和漢三才図会』と『唐土訓蒙図彙』を比較対照表（表1）としてまとめ、『和漢三才図会』のみに見られたものは巻末に記載した。尚、本文中の『和漢三才図会』、『唐土訓蒙図彙』、『世界人物図巻』についての挿絵は、それぞれ注一、注二、注九によった。

表1 『和漢三才図会』と『唐土訓蒙図彙』比較対照表

有無：○有り △漢字は同じ（或いは旧字体）だが名称が違う ▲違う名称だが、記述は類似している ◎違う名称だが、漢字は類似している ●旧字体 記述：○不明

名称 (和漢三才図会)	唐土訓蒙図彙			挿絵
	有無	記述	頁	
おらんかい 元良哈	○	ヲランカイ ^{クツケン} 達且ノ属国ナリ	188	5
こうち 交趾	△	一名安南此国人性好狡 ^{クタク} ○ヲ剪 ^{ハサ} ミ既 ^{スアシ} 足 ^{ミク} ニテ醜 ^シ 賊盗ヲ高 ^{クツト} フ後漠ノ馬援コレヲシタガヘタリ	195	3
こうい 紅夷	●	—	173	2
らうこ 老撾	○	安南ノ西北ナリ古ノ越裳氏也此国人ノ性痕 ^{イアリ} 戾ニシテヨロシカラス	195	3
ひんとんろう 賓童電	△	此地佛書ニ言王舎城ナリ今ハ占城 ^{シツ} ノ隸 ^{ソク} ナリ地主出ル時馬 ^{ソク} ヤ象ニ騎ル	195	2
しんろう 真臘	△	此地廣別ヨリ舶ヲ発シ北風十日ニシテ至ル也此地ノ事真臘風土記ト云ニ詳ナリ	195	2

ほかん 蒲甘	△	其国王金冠ヲ戴キ金銀屋ヲ飾ル	203	3
とりみ 登流眉	△	此国ノ人手ヲ交ヘテ两膊ヲ抱テ礼ヲナス	211	3
かりよう 訶陵	△	此国ノ人木屋重閣ヲ造椶皮ヲ以テ蓋酒食手ヲ以テツマミ食フ	200	3
なんばりよう 単馬令	△	宋ノ慶元二年ニ金三椶金〇一柄ヲ此国ヨリス、ム国ニ地主マ	208	3
ママ 瓜(瓜)哇	○	此国東南海嶋ノ中ニアリ飲食木ノ葉ヲ以盛り手ニツマミ食フ凡草蟲ノ類皆烹テ食ス	196	2
ほかん 蒲家竜	△	海東南ニアリ国人ミナ頭ヲ剃ル此国胡椒檀香沉香丁香白豆蔻ヲ出ス	203	2
だいじや 大閩婆	△	此国綿羊鸚鵡珠寶貝〇ヲ出ス	198	1
さばママ 三仏齋(齋)	△	南海ノ中ニアリ此地ニ犀象珠璣異寶香藥ノ類ヲ産ス泉孛ヨリ一月ニシテ至ルナリ	196	2
ぶらかん 仏囉安	△	此国ニ飛来ノ銅神二個アリ六臂ト四臂アリ六月十五日ヲ生日トス	196	5
さんふだ 三伏駄	△	—	178	4
ばんこ 盤瓠	△	盤瓠ハ高辛ノ時ノ犬也ソノ時犬戎ヨリ責ケリ其将ノ首ヲ得ン者ヲ婿トセントアリケルニ犬呉將軍ノ首ヲ御テ来ケレハ帝女ヲアタハラル犬女ヲ負テ南山ニ入り六人ノ子ヲウムソノ子孫〇〇タルナリ	194	1
くこく 狗国	○	此国ノ人男ハ狗ニテ身ニ毛ヲヒ衣ヲキズ物イ、犬ノ如シ女ハミナ人ニテ能漢語ヲナス	199	4
しかりや 斯伽里野	△	山上ニ穴アリテ火出ツ国人火石ヲ穴ノ中ニ扞レハ爆テ皆碎ク此火モヘ出テ林木ヲヤカズ石ヲ焚	203	3
うみん 羽民	●	海東南崖岫ノ間ニアリ毛羽ヲ生ンテ飛シカモ遠ク飛コトアタハ以人ニ似テ卵生ス	204	2
ぶんしん 文身	○	—	179	4

扶桑	△	—	171	4
大食勿拔	△	此国多ク乳香樹ヲ出ス皮ヲ斫テコレヲトル	197	4
大食	△	此国山谷ノ間ニ樹アリ其花人ノ首ノ如シモノイワズ只笑フシキリニ笑ヘハソノマ、落花ス	200	4
麻離拔	△	此地ニ異香瑤珠犀角象牙珊瑚○ヲ産ス金銀ヲ錢トシ交易ス	199	5
勿斯離	▲	此○ノ山ニ天生ノ果樹アリ蒲○(ホロ)ト名付ク採リ食ヘシ其外産多シ	201	2
白達	●	此国珍寶多シ酥酪餅肉ヲ食フ魚菜○シ金銀玻○○ヲ産ス人雪布ヲ以テ頭上ヲ纏フ	208	2
勿斯里	△	此國兩フラス天江アリテ溢ル時ハ四十日田ヲ浸ス水退テ耕ス老人水ヨリ出テ吉凶ヲ人ニ告ルト云リ	201	5
吉慈厄(尼か)	△	此国ノ地西北極ニ近シテ寒シ蓄牧馳馬多シ	209	2
眉路骨	△	此国七重ノ城アリ黒光ノ石ヲ用テトス毛段ヲ衣トシ肉麵ヲ食トス金銀ヲ錢トス	214	2
故臨	●	国人黒色好テ弓ヲ帶中国ノ人船ニテ往ハ大食ノ人必コ、ヨリ小舟ニ易テ乗去ル	210	2
木蘭皮	●	此國産スル所○一粒ノ長三寸瓜、四五尺胡羊ノ高三四尺尾ノ大サ扇ノ如シ春ニナレハ腹ヲ割キ苻ヲ取フ數十斤再ヒ腹ヲ縫ハヨク活ルナリ	198	3
黙伽	○	大食國ノ祖師蒲羅○ト云人ノ妻荒野ニ在テ男子ヲ生ス洗フ水ナケレハ地ニ棄テ水ヲ尋テ水ナシ立○テコレヲミレハ脚ヲ以テ地ヲスルソレヨリ一ノ泉湧出テ甚清シ	200	5
彌瑟羅	▲	此国主ナシ豪キ者更ル更ル互ニ事ヲ主ル國人獵ヲ好ミ日々ニ獸ヲ射テ食ス	197	5
沙彌茶	△	此地太陽西ニ没ルノ地ナレハ晩ニ至テ日ノ没ル声雷雲ノ如シ國王城上ニ人ヲ聚メ鐘ヲ鳴シ鼓ヲ打テ混雜サナケレハ小兒驚ク	197	2

ちゅうれん 注 登	●	ナンイント 西番南印度也象ノ背ニ屋ヲ立テ勇士ヲ載ス	190	4
はもろ 撥杖力	△	此国人五穀ヲ識ス肉食ヲナス常ニ牛ニ針シテ血ヲトリ乳ニ和シテ生ヲノム身ニ衣ナシ腰ヲ羊ノ皮ニテ掩フ	213	2
さいなんい 西南夷	△	西南夷国人髪ヲ雉リ足ヲ跣ニシ斑花布ヲ衣毡ヲ布キ刀ヲ帯ヒ弩ヲ帯ブ	194	2
いんとん 印都丹	△	国人身黒色地熱シテ雲ナシ	191	5
しゃかこう 沙華公	○	国東南海中ニアリ其人常ニ大海ニ出テ人ヲ劫 ^{ワヒヤカ} シトラヘテコレヲ憐閻沙国へ賣ナリ	207	2
せんきょう 穿 胸	○	盛海ノ東ニアリ胸ニ竅 ^{アナ} アリ ^{ケツトキ} 尊 者ハ衣ヲサリ○ (いやしき) 者ニ竹木ヲ似テ胸ヲ貫 ^{トブ} サシメテコレヲ擻シム	206	2
ふしのくに 不死国	△	此国人色黒シテ死セス不死樹アリコレヲ食ハ ^{イノチナカ} 壽 シ赤泉アリコレヲ飲ハ不 _レ 老	212	2
こうけい 交脛	○	国人脚脛曲 ^{スチマカリ} 辰テ相交ル	205	2
あしなが 長脚	△	長脚国ノ人ト長臂国ト相近シ其人常ニ長臂ヲ負テ海中ニ入テ魚ヲトル	182	2
ちようひ 長 臂	△	→長脚 が長臂を背負う姿で共に描かれている		
むみく 無腹	○	海ノ東南ニアリ男ミナ腹肚ナシ	205	2
せつじ 聶耳	△	無腹国ノ東ニアリ其人ノ身虎文アリ耳長シテ腰ヲスク行トキハ手ニテ耳ヲ捧テ行ナリ	204	2
じよにんこく 女人国	●	此国男ナシ女人井戸ヲ照シテ子ヲウム又 ^{ハダカミ} 裸 形ニ南風アタレハウムト云	198	2
はるしな 波斯	△	此国人身ノ色黒シ金花布ヲ以テ身ニ縵フ王ハ虎皮ヲ以テ身ニ蒙フ出ルトキハ軟○ニ乗ル	212	2

かふり 晏陀蜜	△	此国ノ人身黒漆ノ如シ山蠻ト号スヨク人ヲ食フ故ニ船人敢テ岸ニ近ツカス	200	2
こんらんそうし 崑崙層斯	▲	西南海ノ上ニアリ野人身ノ黒コト漆ノ如シ番商奴トナシテヨク忠ス →層斯期國として、野人が描かれる	204	3
なんにから 南尼華羅	○	此国人佛教ヲタツトミ牛ヲ <small>クブト</small> 尊 <small>フン</small> フ牛ノ糞ヲ以テ屋壁ヲヌル	201	5
だいしん 大秦	△	西方ノ番商コ、ニ○（アツマル）其王布帛ヲ以テ金字ヲ織出シテ <small>カサリモノ</small> 纈頭トス此地ニ珊瑚ヲ生ス	208	3
うてん 于闐	○	此国人死スレハ火ヲ以テ化シ骨ヲ收テ葬ル其塚ハ沙ヲ以テ作ル塚門ヲ守ル者ヲ沙門僧ト称スコレヨリ中国モ沙門ト称ス	197	5
ぎきよ 義渠	△	—	180	2
うい 烏衣	△	此國ノ人漢人ヲ見レハ <small>ウシロムキテ</small> 背行面ヲ見セシメスコレヲミレハ昂コレヲ殺ス	198	5
どうめい 道明	○	—	179	2
こくもう 黒蒙	●	—	177	4
もきから 默伽臘	△	国ニ主アリ珊瑚樹ヲ出ス鉄ノ○ヲ以テトルト云処ナリ	209	5
とほ 都播	△	此国ハ○勒ノ別種草ヲ結テ○トス耕作ヲシラス百合ヲトリテ食トス貂鹿皮鳥羽ヲ服トス	204	4
こうよく 孝慮	●	此国人ノ性質直ニメ（シテ）客旅ヲ好ム貌大ナリ戦ノ具唯 <small>ク</small> 箭 <small>カゴ</small> 一色アリ	199	4
あさぶ 阿薩部	△	国人獵ヲナシ其肉ヲ重 <small>フミカサテ</small> 盃 <small>サテ</small> テ石ヲ以テヲシ汁ヲトリ米及ヒ草子 <small>クサノミ</small> ヲ肉ノ汁ニ醸シテ酒トナスコレヲ飲ハ酔フ	207	4

えんぎ 焉耆	○	毎歳十二月 ^{ヨロヒ} 甲ヲキル者ト衆人トタ、カハシメテ年ノ豊儉ヲ占フ	201	3
かいこつ 回鶻	△	エヒス ^{クハイコフ} 匈奴ノ種類ナリ本同 ^{カハ} 紇也唐ノ徳宗ノ時其地ノ鶻ノ○コト鶻ノ知キヲ以テ回鶻ニ易ラル紇鶻音ノ同ヲ以ナリ	196	3
こつり 骨利	●	—	176	2
くんしこく 君子国	△	—	171	5
こけつたん 黒契丹	△	—	171	2
はしぜつ 巴赤舌	△	—	171	5
ほうせき 包石	△	—	172	5
こりようあだつ 吾涼愛達	△	—	172	5
あし 阿思	○	—	172	5
むれもうこ 無連蒙古	●	—	172	5
めきり 滅吉里	●	国人言語韃靼ニ似タリ應天府ヨリ四箇月ニ至ル	209	5
ろもせ 隴木節	△	昔日番王ノ都ヲ建テ百姓住ス應天府ヨリ馬ニテ半年ニ行ナリ	211	5
しちばん 七蕃	◎	此地馳牛ヲ出ス種田アリ	192	3
ぼとう 婆登	●	林邑国ノ東ナリ稻毎月一タヒ熟ス文字ヲ貝葉ニ書ス	189	1
かじよう 訶条	●	金遼山廟ニ石○(カメ)アリ人モシ飲食ノ盡ナントスルトキコレニ向テ礼ヲナストキハ飲食悉ク具ル	210	3

こんご 昆吾	○	此国鍔鉄ヲ産スコレヲ ^{ハモノ} 刃トナセハ玉ヲ切ルコト泥ノ如シ	213	2
ないはけこわしょう 退波係黒和尚	△	此国城池房舎アリ羊馬ヲ出ス林木甚多シ	192	5
まか 麻嘉	●	此國土人麻霞出世ノ處其国神ト称シ佛トス毎年皆来テ廟ヲ〇ス	214	5
ばらしや 婆羅遮	●	此国人狗ノ頭猿ノ面ヲ並ヘ服 ^キ テ男女晝夜歌舞ヲナス	213	3
けんと 懸渡	○	此地山溪不 _レ 通土人石ヲ壘テ室トス水ヲ飲ニ相引テ手ヲ接ヘテ飲也	212	2
げきほく 織濃	△	永昌郡南千五百里ニアリ国人尾アリ坐スルトキハ先地ヲウガチ尾ヲ、サメテ後ニ安坐ス人其尾ヲ折レハ卒然トメ（シテ）死ス	208	2
うちよう 烏衰	○	此国ノ民死罪アレハ殺サスコレヲ空山ニウツス事ノウタカハシキコトアレハ藥ヲ服スレハ清濁自ラ驗アリ其事ノ輕重ニ随テ決断スルナリ	212	5
ごけいばん 五溪蛮	●	此国人父母ノ死ニ遇テ鼓行踏歌シ親属アツマリ飲 ^{サカモリス} 宴家産ヲ盡シテ椰ヲツクル	213	1
ぢうこく 藏国	●	此国城池屋舎アリ地ニ大柳樹ノ産ス	214	5
まあた 麻阿塔	△	此地ノ神ヲ舎屋ト云城池アリ	188	5
にちろう 日蒙	●	国ニ房舎アリ種田姜ヲ出ス	189	5
しやら 娑羅	▲	此国ノ男女皆刀ヲ佩 ^{フヒ} テ行人トムツマシカラサレハ刺殺シテ他所ニハシル一月ノ外ニナルトキハカマヒナシ	202	3
こうがん 後眼	△	—	175	5

だいら 大羅	△	—	174	5
とま 土麻	●	—	173	5
しんれたい 深烈大	△	—	174	4
きほけい 乞黒奚	△	—	176	2
もしけつ 木思奚徳	△	—	176	2
はり 波利	△	—	176	1
ありしやろ 阿里車盧	△	—	173	5
しんひほ 鳥伏部	△	—	179	5
かつさい 歎祭	●	—	175	1
てとん 鉄東	△	—	175	2
さいげきんひょう 采牙金彪	△	—	175	5
こんごさんぜん 昏吾散僧	△	—	177	2
そぶしのか 蘇部識匿	△	—	180	1
しんざい 正瑞	△	—	181	3
もとい 木直夷	△	—	178	2

けんだ 乾陀	△	—	180	5
ていらい 丁靈	○	—	182	2
さいばん 西蕃	●	一ハ鬼方トイフ武丁鬼方ヲ伐ツ三年コレニ克トコレナリ城池房舎ナシ多ハ山林ノ内ニ坐メ (シテ) 人ノ肉ヲ食フ其国人佛ニ奉スル者皆刺麻ト称ス	194	5
くじら 鳩尼羅	●	此国乃千西番佛牙石ノ出ル○ナリ	193	2
とばん 吐蕃	○	假西蕃ト号ス本西羌	190	5
しょう 情	△	此国西蕃ニアリ乳ヲ食テ活トス應天府ヨリ行コト五月ニ至ル	192	5
かし 可只	●	コレ西番寶物ヲ出ス処ナリ	202	4
ばら 馬羅	●	此国異賁生頭香ヲ出ス	191	5
さばじかん 撒馬児罕	△	サマルチヤ	182	1
にゅうふ 入不	●	此国城池種田アリ胡椒ヲ出ス	193	5
こうま 哈蜜 (密)	△	西蕃火州ノ東ナリ回回韃靼ト同シ	190	2
きじ 龜茲	○	—	180	3
しんせんり 真千里	○	—	181	5
こうひ 猴獼	▲	一名ハ抹○刺國若別國ヨリ兵来レハ衆ノ猴コレヲ防クニ法アリ敢テ来リ侵サスト云	193	2
うそん 烏孫	○	—	181	2

ていじん 氏人	○	建木ノ西ニアリ其状人ノ面ニシテ魚ノ身ナリ足ナシ胸ヨリ上ハ人ニ似下ハ魚ニ似タリ	193	5
やじん 野人	○	此國大山林アリ野人多シ男子モ○ノ長フ○ノ如シ木葉ヲ食フ	191	2
かいかい 回回	○	国ニ城池宮室田畜市アリ風土ハ江淮ト異ナラス	206	2
ふら 不刺	○	西番ノウチ○馬ノ出ル処ナリ	202	3
さるるこく 巢魯果訛	△	此国城池五穀アリ良馬ヲ出ス	206	2
けいひんら 結賓朗	●	国ニ城池種田アリ黄頭仙人成道セシ処ナリ	206	5
あべきかん 阿黑驕	△	此国人○ヲ射魚ヲ打テ活トス国ニ馬羊ナシ	207	2
へあん 黑暗	△	此地○牛ヲ出ス	192	5
ちようもう 長毛	○	此国人身ニ長毛アリ城池種田アリ晋ノ永嘉四年此人ヲ獲タリ	207	2
いつび 一臂	○	西海ノ中ニアリ其人一目一孔一手一身半体ナリ肩ヲ比ヘテ魚鳥ノ相合カ如シ	191	5
きこう 奇肱	△	国人ヨク飛車ヲツクリ風ニ從テ遠行湯時車ヲ以テ西風ニ乗シ豫弱ニ至ル湯○卓ヲ破ル	210	3
さんばん 三蚕	●	此国ノ民土ヲ食フ死スル者埋メトモ心肝朽スメ（シテ）後ニ復化シテ人トナル	211	2
むき 無臂	△	此国ノ人肚腸ナシ土ヲ食フ穴ニ居ス死シテウツメハ○朽スメ（シテ）フタ、ピ人トナル	211	2
じようり 柔利	●	此国一目国ノ東ニアリ國人膝ヲ曲テ前ニ向フ一手一足アリ	209	5
いちちく 一目	○	此國北海ノ外ニアリ	189	2

さんしゅう 三首	●	此国夏后啓ノ北ニアリ	202	2
さんしん 三身	○	鑿齒国ノ東ニアリ其人一首三身ナリ	203	5
とんそん 頓遜	○	国海島上ニアリ	210	1
てらふら 的刺普刺	△	国ニ城池アリ田ヲウエ明珠異寶ヲ出ス	190	5
めじ 愈児	▲	早耳ノ水ニ愈兒ト云者アリ登山ノ紙ナリ長一尺餘ニシテ黄冠黄衣朱服シ馬ヲ走シ齊ノ桓公ノ時曾テ見ル霸王ノ君興レハ愈兒アラハルト云リ	214	4
ていこう 帝江	▲	状皮囊ノ如シ背上赤黄火ノ如シ六足四翼面目ナシ名ヲ帝江トイフ	217	5
きょうりょう 強良	●	大荒山北極ノ外ニアリ口ニ蛇ヲ銜ム其状虎ノ首人ノ身四蹄アリ	217	2
こくじん 黑人	▲	南海ノ内ニアリ黑人虎首ニメ(シテ)両手ニ蛇ヲ持テコレヲ啖フ	205	5
おうたい 叢泰	●	此神蒼山ノ陽ニ居リ出人光アリ此神天地ヲ動ス甚爽靈ヨク雲ヲ、コシ雨ヲフラス	216	1

【『唐土訓蒙図彙』に描かれない国々】

震旦、朝鮮、耽羅、琉球、蝦夷、韃靼、女真、大宛、東京、占城、東埔寨、太泥、六甲、滿刺加、暹羅、呂宋、阿媽港、以西巴爾亜、
 咬溜吧、飛頭蛮、浮泥、近仏、大漢、長人、榜葛刺、莫臥爾、聖多默、印第亜、琶牛、担波、天竺、小人、弘祿、女慕、擺里荒、蛇魯、
 方連魯蛮、訛魯、獠、蠻、火州、天方、錫蘭山、阿蘭陀、独陰、黑人

その結果一〇六ヶ国中、少しでも両者に共通する記述があるものは九四ヶ国。一方『和漢三才図会』のみにもられる記述は八五ヶ国、『唐土訓蒙図彙』のみにもられる記述は九ヶ国だった。挿絵については、まず、1〜5までのタイプ別の代表例を挙げたい。それぞれ右が『和漢三才図会』、左が『唐土訓蒙図彙』に見る挿絵である。凡そ同じ(5)より吾涼愛達(図一)手に何かを携えている、壺などを持っている、建築物のデザインの違い(4)より大食勿拔(図二)、象やその他の動物と共に描かれる、または人数の増減がある(3)より龜茲(図三)、服装や体の様子(動作含む)が異なる(2)より交脛(図四)、全く異なる(1)より蘇部識匿(図五)である。

以上、両者を見比べ、次のような考えを持った。まずは挿絵での差異だが、『唐土訓蒙図彙』では国々の特徴(特に服装)が、より細かく描かれている。その代表例が羽民(図六)だ。『和漢三才図会』では非常にツルンとした肉体に対して、『唐土訓蒙図彙』では、全身を羽毛で覆い、正に「羽民」であると思われる。他に聶耳(図七)では、『和漢三才図会』で「人々は虎の文様あり」と述べられているが、実際には虎柄ではない。対して、『唐土訓蒙図彙』にて描かれた聶耳は人物が虎柄だ。図三の龜茲は『唐土訓蒙図彙』



図三 龜茲



図一 吾涼愛達



図四 交脛



図二 大食勿拔



には何も記述がないにも関わらず、馬が描かれているのは『和漢三才図会』の「元日に牛馬を闘わせたり、馳け競べをしたりする」という記述をうけてのことだろう。また、^(注四)体や外見に限定するならば、(動作で) 踊っている一目(図八)、穴の位置が違う穿胸(図九)など、細かな差異も認められる。一方で簡素になった例もある(図十)が、その殆どがより忠実に、よりリアルに想像され、表現されているのである。

次に記述の面だが、『和漢三才図会』のみに見られる記述



図五 蘇部識匿



図六 羽民



図九 穿胸



図七 聾耳



図十 賓童竜



図八 一目



は、位置・文化・特徴・補足的な事柄、国人の性格や性質上の特徴を示したものに目立っていた。

『唐土訓蒙図彙』のみに見られる記述は、全部で八ヶ国と少なめだったが、以下、国名と記述部分を取りあげたい。

【元良哈】 ヲランカイ達且ノ属国ナリ

【真臘】 此地ノ事真臘風土記ト云ニ詳ナリ

【三仏斎（齊）】 泉勿ヨリ一月ニシテ至ルナリ

【勿斯離】 其外産多シ

【回鶻】 紇鶻音ノ同ヲ以ナ

【七蕃】 此地馳牛ヲ出ス種田アリ

【撒馬兒罕】 サマルチャ

【猴彌】 一名ハ抹〇刺國

このうち、『和漢三才図会』に似たような記述もなく、

『唐土訓蒙図彙』にて、新しく説明がなされている異国は、真臘、勿斯離、回鶻、猴彌の四ヶ国である。補足的説明や、別名、更に詳しく描かれた書物の紹介がなされている。残りの五ヶ国について詳述する。元良哈でのタツタン（達旦）表記は、『和漢三才図会』では、「その風俗は韃韃と同じである」^(注五)と記載され、属国であるとは書かれていない。三仏斎（齊）での道程を表す記述は『和漢三才図会』では、「広州から船出して真南に取り、半月で到達できる」^(注六)とある。

撒馬兒罕の「サマルチャ」とは呼び名であろうか。だとするならば、「サマルカント」^(注七)と書かれているところがそれに該当するだろう。七蕃の「此地馳牛を出ス種田アリ」とは「七蕃国では山を耕し田をつくっている。駝・牛を産す」^(注八)という記述が似ているといえるが、異なっている。

少し類似する点はあるものの、僅か四年の間にこれだけ、新たな記述が見えるということは、それだけ、異国に対する姿勢が高まり、情報が求められていたといえるだろう。

異国認識の高まりといえば、『世界人物図巻』が挙げられる。『世界人物図巻』は、享保五年（一七二〇）刊の西川如見著で有名な「四十二カ国人物図説、いわゆる「世界民族図譜」の一例である。これは西洋系民族図譜であり、西洋の知識が盛り込まれている。それは挿絵にも現れており、例として、小人を引いてみる。『和漢三才図会』では上半身は裸なのに対し（図十二）、『世界人物図巻』では着衣している。（図十二）他に『和漢三才図会』で見られない、諸尼利亜人（イギリス）、伯刺西爾人（ブラジル）、意太里亞人（イタリア）などの国もみられる。『世界人物図巻』には、



図十一 『和漢三才図会』 小人

人物図の隣に該当する国の説明が盛り込まれているのだが、例えば、諸尼利亜人については、次のような記述がなされている。

諸尼利亜ハ阿蘭陀ノ西

隣海中ノ島国也尤寒国

ニテ風俗阿蘭陀人ニ似テ

其種又歐羅巴ニ属スル

ここで注目したいのが、「寒国」という記述である。『世界人物図巻』中には、他にも「煖国・煖地・熱国・大寒国」といった言葉がみえる。暖かいか寒いか、四ヶ国の内、二ヶ国において明確に示されているのだ。これら気候は、国の位置、及び国同士の間接関係を念頭においておかなければ、書けないものだろう。つまり、『和漢三才図会』刊行後、何年もしない内に、西洋の知識により位置関係が意識され、把握されつつあるのである。

また、『和漢三才図会』が誕生するおよそ一〇年前の萬曆三〇年（一六〇二）、『坤輿萬國全圖』^{（附註）}が刊行された。この世界地図にしても、『和漢三才図会』中に登場する異国全一九〇ヶ国中、二八ヶ国が描かれている。ハッキリとその



図十二 『世界人物図巻』 小人

名を示す国々は、韃靼、于闐、榜葛刺、真臘、琶牛、三仏齋（齊）、滿刺加、太泥、回回、呂宋、暹羅、道明、老撾、蒲甘、占城、火州、焉耆、撒馬兒罕、天方、哈蜜（密）、黑人、以西巴爾亜、小人（矮人「こびと」と表記）、女人国、一目、波斯、狗国、長人である。他に、同じ名称ではないが、女真、瓜（瓜）哇（小爪哇・大爪哇と表記）、咬溜吧（字は雅罷牙で、振り仮名にジャガタラと見える）、琉球（大琉球・小琉球と表記）、天竺（小天竺・西天竺と表記）も現れていた。両者を併せると、三三ヶ国見当たる。

以上挙げた三三ヶ国のみならず、『和漢三才図会』に紹介されていないくとも、宝曆一三年（一七六三）平賀源内作『風流志道軒伝』に見られる「夜國」や、『世界人物図巻』に描かれる「加拿林（加拿大と記載）」、他に「鬼國」も描かれており、興味深い。地図にも描かれるということは、当時「女人国」や「狗国」「一目国」が、人々の間で信じられていた証明にもつながるだろう。

江戸時代は確かに鎖国であって、情報が民衆の手元にまで届かなかったかもしれない。しかし、日本だけ見ても、『坤輿万国全図』という世界地図や『世界人物図巻』が刊行され、人々の間に異国は、身近となった。また、シーボルトのような異国の者が日本を訪れ、知識を広めていた。

シーボルトに至っては、実際にその目で出会う、民衆にとって近い存在であった。

このような時代に『和漢三才図会』は生まれ、おそらくは人々の異国に対する認識を開花させ、尚且つ「異国」を身近にしたと思われる。その後、引き続いて出版された『唐土訓蒙図彙』が非常に詳しく異国像を想像している点でも、人々の間に深く異国に対する想像力が広がっていたと思われる。広がりの中で生まれた世界認識とは、一見荒唐無稽にも思えるが古くより人々の心に存在していた異国、及び新たに想像された異国、海の彼方より運ばれてくる事実裏打ちされた異国像が合わさったものである。

『和漢三才図会』に描かれた異国から伝わってくるものは、異国とは『竹取物語』の月の都のように憧れや恐れを抱くものでなく、決して届かない存在ではないという考えである。対等に同じ目線で以て、触れることのできる異国である。それこそ、悪い面も良い面も見ることができ。江戸時代は、西洋からの知識や自国の漂流民たちから異国の話を聞く中で、急速に異国に対する欲求が高まっていたのだろう。だからこそ、『和漢三才図会』は誕生したのだ。「荒唐無稽」だとあっさり切り捨てるのではなく、想像し褒め称え或いは非難し、確かに海の向うに在る「国」として、

人々の間に浸透していたのである。これを本稿の結論としたい。

注

(一) 寺島良安著 島田勇雄等訳注 『和漢三才図会三』(平凡社・

一九八六年四月十日刊行)

(二) 朝倉治彦監修 『訓蒙図彙集成第一六卷 唐土訓蒙図彙』(大

空社 平成一〇年十二月二十五日刊行)

(三) 注(一)に同じ。三三五頁。

(四) 注(一)に同じ。三八七頁。

(五) 注(一)に同じ。二五八頁。

(六) 注(一)に同じ。三〇七頁。

(七) 注(一)に同じ。三八三頁。

(八) 注(一)に同じ。三六〇頁。

(九) 九州大学デジタルアーカイブ <http://museum.kyushu-u.ac.jp>

より

(十) 織田武雄 秋山元秀 『坤輿萬國全圖(坤与万国全図)』(臨

川書店・一九九六年十一月刊行)